小曲詩集

鳥小の囁

樋口翅影著

紅葉會出版

1923

始

特109
390

小曲詩集

小鳥の啞

樋口翃影著

紅葉會出版

大正
12. 1. 17
内交

著　者

末永牧山筆及刻

樋口君のために

露はやさしや
　あしたにとける
とけてひとつに
　なったとみれば
露はやさしや
　すぐ消える。

露と消えましよ
あしたが來たら
わしもそなたも
ひとつにとけて
露と消えましよ
朝露と。

大正十一年四月十三日

生田春月

序として

いつの世にも果知れぬ無限な大自然にいとも若き魂を漂迫せしめて無言のまゝに育ち行く小鳥こそ哀れである、萬感を胸に秘めそこに聲なく、言はんとするも言ひ得ぬ悲しみ！そこに純白な誇も永遠の裡に消える、あゝ……題して『啞の小鳥』こそみじめなものでなければならぬ。

氏と私は遇然に知り合ひ一言のもとに謂ひ知れぬ、或る微妙な力に結びつけられたものである。そして氏の半生を知つた。併し氏の半生はあまりにも慘めなものであつた。青春の熱情をそゝり春を琴ずる鳴禽の中に己れひとり默然と逝く春の情緒に浸る啞の小鳥の如く。聞くだに憂愁の念が湧き哀憐が心一ぱい溢れるのである。そして此の小曲集は氏の半生の最も苦しき生活の中に生まれたものであることが確然としてゐることが偲ばれる。

然し世間では氏をとらへて種々な比評をしてゐる—快活な人！陽

氣な男！無邪氣な者！奇拔な男！變り者！……こんな噂がよく私の耳にも入つてゐた。事實氏は人に接するに快活で奇拔な中に而も眞面でゐる。然しながら氏の性格はこの小曲に表はれてゐるやうに極めて靜かなメランコリックな性格の所有者である。でも氏は『此の小曲を以て俺の半生と心理を知ることは出來ない!!』と言はれてゐるが全く其通りである氏の全詩は數千編を以て算され外に各種の創作的作品も隨分多くあるのだつたからこの小曲を以て氏を比評することは不可能であることは事實である。

大正十一年一月二十二日の酒田新聞紙には東北的にも有名な歌人「白旗浩蕩氏」の筆で左の如き記事が發表されてゐる之を以ても氏の性格を多少偲ばしめることであると思ふから加へて見ることにする

紅葉會（註釋ー大正七年七月氏及外數名の發議によつて創立せられたもので目下機關誌の編輯は氏が擔當して居られるー）全体から言つても左様だらうが「翅影」氏一個人としても包容力親和力に富んでゐるかに思ふ、氏がいつか御いでになつた時悄然『私は親も兄

弟もありません、ほんとこのひとりぼつちです』と云はれたことがある、私はいたく動かされ狹苦るしい二階の上に慘として相對した事があつた不思議な事にはそんな場合でも氏は餘り相手に陰鬱な暗い感じは與へない。どこか明るい處がある、すぐあとから冗談で言ひたくなる位だ。宗教に赴くものに不幸な人が多いやうに文學を愛する人の中にも我等は間々不幸な人を見出す、一体文學といふものは不生産的なもので一面には算澤は幸福のやる傾があると共に他面には青雲の望みを失つた世平兒の鬱懷をやるとか或は何かゞ動機となつて物質的方面には目を閉ぢて精神的向上を思ひ立つた人などがやる傾がある。兎角さういふ人達には一と癖も二癖もあるのが常で一寸親しみ憎いものだが「翅影」氏には如上の嫌がないやうに見える此事は紅葉會發展上都合が善かつたに相違ない、例へば相敵視した甲乙兩團体のいづれの人々をも其後援者、同情者又は寄稿家として網羅して居るが如き「翅影」氏も中々政治家だと言はざるを得ぬ……

白旗氏の文面から觀ても著者はどんな人格の人かとすぐ相象さる

〻に違いない、故に私は今多くは謂はぬ、唯、氏の此最初の出版を心から祝福して止まぬのである。と仝時に氏の代表的詩集となつてゐる『砂に埋れて』―と『碧い想瞑』や其他『赤い壺』とか「銀の花壇」等の詩集が發表されずに居ることは氏のためにも又詩集が發表されずに居ることは氏のためにも又詩界のためにも遺憾であるし自然界の藝術方面からも惜しいものであると思はれる。然し何れまた出版されることをすゝむると共にさうした曉にはぜひ氏を見出して貰ひたいことも愛讀者にお願して置く次第である。

おゝ……『啞の小鳥』よ！汝幸多くあれ

―一九二二、秋九月―

蔦野草外

砂山畑

―この一篇を詩人翅影兄にさゝぐ―

ほのぼのと春にぬくともり
覺えつゝ海邊にちかき
砂畑ゆくも。

×

春まひる氣だるくてらす
陽に醉ひて砂山畑を
くとりくだれり。

×

砂ほこり立つも寂しき
春まひる山畑ゆけば
鳩の啼くなり。

鶏の糞を干しあり村道の
ところどころの
くぬのかたへに。

×

足袋にしむほこり寂しも
しみじみと疲れてひとり
草に休めば。

一九二二、四、六日

米村久生

▽……序……△

私等は世界兒である！私等の魂は無限に漂迫してゆく！大氣は悉く灰色である！

光潜めた大氣のその中に、音もたてず、焰もあげず、炎々と燃えてゐる一團の猛火こそ吾等の精氣であり生命である！。私等の限りなき悲哀を知つてゐるものは大海に降る日光のみである、だが私等の燃ゆる思ひの接吻も冷き海の心には徒となり行く。

―渾沌よ！虚無よ！霧散せる「氣」の亂舞よ！＝生命ある「詩」はそこに呼吸せり＝

―一九二二、二、十一、記元節―

磯崎流光

『人世の悲哀は何から生ずるか？』と私は氏に問ふたことがあつた。その時氏は靜かに『境遇よりだ!!。』とたゞ一言答えたのみだつた、

私は其意味を考へて見た。

全く氏はその『境遇』の二字に支配された一人であつた、あらゆる社會を切り拔けて來た。そして、あらゆる苦痛と奮鬪して來た。それは私が述べるまでもなく、世間はよく氏を語つてゐるのだらう……。

私は氏の詩集を讀んだ。親を失ひ兄弟も持たぬ氏は充ての愛から遠ざけられ、再び戀も失つた。社會は何時も氏の生命を奪はんとした。然し此の絶對な悲しみ、その華かな戀によつて得た所の新らしい人間の味は……孤獨の淋しみ！其處に生命の再生があつた。讀んでゐる中に氏の苦鬪時代が判然と目に浮んで來て泪ぐましい心に覆はされてくる。―氏の精神狀態がすぐ表はれてゐる。何んだか女々

しい心の所有者のやうに或人には思はれるか知れない。けれども事實はさうした心理を常に表現してゐるのではなかつた、それは氏と語るすべての人が証明してゐる。氏は常に人生に對して「善」をもつて進んでゐる人だ。氏の語るその沈痛の言葉の裏面には何物か我々に暗示してゐるのであつた。又氏は文章に野心を持つてゐる人ではなかつた。私の訪ねる時にはいつも形苦しい法律や經濟やらの書籍のみを開いてゐるものだつた。そんな時私はよく「新らしい小說―思想問題を研究しては？」とすゝめると、氏は美くしい微笑を漏しながら「今そんなものを見て居らるゝ時期ではない！俺には少し早すぎる！」といふのが常だつた。

―【境遇に支配された】―（其處には如何なるものと雖も泪ぐまずに居られないローマンスが所在してゐた、それは氏のすべての手記に表はれて居る。）かうした形苦しい研究の余暇に書く氏の【詩】は！感じが最高調に到達した心の叫び！その中によく人生の孤獨をたのしまうとする精神！からした中に私は氏を見出した。そしてこの詩

は（今後のと共に）どんなに氏にとつて慰安であり、幸福であるかを……。

―一九二一、二、二一夜―

（淋しく……冷たい部屋にて）

池田重一郎

自序

私は、この貧弱な、ほんとうに詰らない詩を愛するすべての皆様に公開しやうなどとは生れて以來夢想だもしなかつた。けれ共今先輩や友人にすゝめられて、大膽に、而も得々として敢て發表することにした。題して【啞の小鳥】といふ―廣莫な宇宙に―明るい社會に―かうした哀れな小鳥がどんなに多いことか？私も其内のものだつた。言えそうで云へない若くして純な氣持―それでも生きねばならないといふ氣持！それが若い私共の誇りでなければならなかつた。

私は自序としていろんなことを書いて見たい、尠く共是迄考へて見たことを、せめて萬分の一でも書いて見たいと思つてゐたが今はそれも出來ないのは遺感だ。で、かうしたことは後日又皆様に接することがあつたら述べることにする。それから此の詩は私が大正七年四月頃から仝十年の十二月頃までの作から、ほんの一部の小曲のみを拔いたものであるから是を以て私の心理を窺ふことは出來まい

況して私の「生活」と「境遇」とを知ることは不可能であらう？是も後日何等かのことによつて御目にかけることがあると信ぜられる。然し私の『詩』は自分のためにのみ價値あることを一言して置く。

此の詩集は大正十一年の六月頃に發行する筈であつたが出版元や印刷所の都合で遅れ、とう〳〵只今發行するの運に到つたのは思ひがけないことだつた。それで發行を待たれて時々御たより下されたすべての皆様に特に御許を乞ふて置く。

猶此『詩集』の發行をすゝめてくれ序文までも贈つてくれた先輩諸氏や御多忙中口繪までも執筆し自ら調刻して下された「東京朝日新聞記者」末永牧山氏や、わざ〳〵東京から私のために『小曲詩』までも贈つて下された生田春月先生の厚志は茲に深く感謝して置く次第である。

—一九二二、一一、廿三— 新嘗祭—

酒田市外南水出にて

樋口翅影

ひめゆり

四十七篇

夢

私は！…
昨夜も夢を見た
青いようでー
紅いようなー
それは人に語れない夢を。

君と別れて

あんなに元氣で出で行つて
面白い芝居をうんと見たり
下駄を取るとき敗けずに取つて
話しながら歸つて來たが
『さようなら』と云ひおいて
家に入つたあとからは
詰らない氣がむさっと起り
もう今度こそは行かない。

星一つ

だまつて見てると
魂もとける
暗い夜半(よなか)の星一つ。

運動會で

勝せてあげたい
わたしの心
あなたが走るたんびに
兩手に汗を握つて
祈つてゐました。

水車の三太

水車が止まつても知らないで
麥が搗けよが搗けまいが
たんだニコ〳〵笑つてる
村の三太が羨ましい。

月が出るよだ

月が出るよだ早くかへろ
うつかりして居ると
人目に付くよ
あんなこと云つて別れて來たが
どつちへ行つても二人の噂
教えたお月様にくらしい。

月見草

寂しい川の片ほとり
誰を待つのかたゞひとつ
薄暗がりに頰美んで
君を待つなり月見草

巣

あなたはあなたの巣を造れ
私はわたしの巣を造る
そんな社會であつたとて
二人はやつぱり一緒に造ろ。

軒明

軒の明りにちらと見る
蜘蛛の網をば切るよりも
ほんとに雑作もない命
たゞあの人のためにつなぐ。

小鳥

ほろほろほうろと啼く小鳥
湯の川の宿に住んでゐて
今朝もお客の膝の上へで
ほろほろほうろとないてゐた。

（函館にて）

ねむの木

秋が來るよじや眠らんせ
春の音すりや眼を覺ませ
山じやねむの木淋しかろ
わたしの庭に移らんせ。

きむしめ

おしろい付けた小娘も
わたしは好かぬでないけれど
どっちかと云へば
山家育ちの生むすめが
わたしの心に思はせる
にゝ…ほんとうに思はせる。

暗い晩

風の吹く夜は一番すきだ
雨戸鳴っては淋しいと
あなたが云つて寄ったもの
暗い晩ならもっと好きだ
お化(ばけ)なんかは出ないかと
あなたはわたしに寄ったもの。

風船玉

風もないのに飛んでゆく
なんにもしないに逃げてゆく
わたしの大切(だいじ)なゴム風船
わたしを殘してどこへ行く。

屋根から

屋根の上からそと見れば
青田の中にぼんやりと浮く
ありやなつかしい村なのに
君の姿はなぜ見えぬ。

中止か？

あんなに時々來てゐたあなた
此の頃病氣で寢てゐるのに
なんでこんなに來ないだろ
こんなはずなのないのだに
もう止めたのかしら。

だまつて居ても

「だまつてゐても
妾の心が解かるでしよう」と
云はれて見たが
「だつて解からない」と云つた
古い私が思はれて
ほんとに口惜しい氣が今起る。

炭

黑くなつたり紅くなつたり
山から出された私は
灰になつたら白くなる。

さびれ

風が吹く、風が吹く
軒に吊した風鈴に
木の葉を散らす
風が吹く。

檸檬

紅い檸檬がわたしなら
優しいあなたの手によつて
はだかにされて割かれても
決して何んにも云ひません。

花賣へ

今日はお花もいらないけれど
あなたのお顔が好きだから
だまつて一本買ひました
賣つた人なら知ろまいに。

四日も

あゝして書いて送つてみたが
誰かに見せはしまいかと
今日で四日も胸が鳴る
さて〳〵氣にかゝる。

無ければ

煙草ないのに一番のみたい
財布見たつて一文もない
それから猶更のみたくなつた。

ひめゆり

人に見せようと咲いたのに
たゞ羞しいふりしてる
百合の心はにくらしい。

小窓に

小さな窓からちらと見える
君の笑くぼの可愛さに
誰知ろまいと忍んだら
後から粉雪がホロ〳〵と
歸るうしろに跡がつく。

焦慮

芝居へ行つたらあなたも居つた
わたしの前でだまつて居つた
聲をかけよかかけまいか
こんなことなど思つてゐると
小さな心がおだやかならず
はて、何か云はうか云まいか
なんにも云はずに歸つた後で
口惜くつて唇を嚙んだ。

嬉しさ

どんな女を一寸見ても
どんな娘に聲かけられても
わたしのこの頃
妙に嬉しくなつてくる。

川邊

泣いて見たいは夏の夕
あつつい陽中の胸抱いて
川の邊りに立ち通し。

毛虫

毛虫の子供か？毛虫の親か？
ひらひらひーらと舞ふ蝶
ほんとに美し
ほんとに怖い。

鼠の奴

あゝ…口惜しなあ
ほんのり熱い心で抱かれて
ゆっくり眠つて居つたのに
鼠の奴が食ひ破つて
ほっかり夢から覺めたのを。

枕

いつもあなたは可愛いいなあ
あなたはわたしと寐る枕
悲しいと泣けばぬれてくれる
まあ！ほんとにいづらしい。

或る家庭

藏の庇の屋根裏に
コーモリが巣をくんで
子供を產んだが
その子もみんなコーモリだつた。

鶯

啼いてみせよか、わたし鶯
わたしがないてあの方の
暗い心が晴れるなら
いつまでだつて啼きませう。

或る日

人も歩かないお寺の通りで
行き過ぎたのは小娘二人
こちらは一人
あとで二人は何とか云った
耳を濟してゐたけれど
何を言ったか聞えない
ハテ何と云ったか知りたいなあ。

短い日

はて何をしやうか、と
思ってゐると
梧桐の葉がガサ〳〵と
落ちる音を聞いた。

友の家

流の元にしやがんで
百合の花でも見るような
あの日のあなたが今日もまた
夢の心で見るならば

わたし毎日遊びくる
けれどもこゝには娘もない
流元から見たとても
バケツばつかり見えるもの。

蟻

砂もぬれると匍ひよかろ
陽も照らないし影もない
忍ぶに都合のよいようじや
椽の下からチラ〳〵と
蟻が一匹匍つてくる。

煙り

好んでのんだ煙草でも
咄いてしまへばうす闇に
スーと姿も消えてゆく
にくい煙草のこの煙り
俺の心も知らないで
だまって姿をかくしとは。

唖の蟬

「わたし決して泣かないわ」と
云つたあなたも近頃は
唖の蟬でもなからうに
青い葉かげに身を入れて
何んでなくのか泣きじやくり。

椿

青葉のかげに顔出して
あなたは春に咲く椿
若い少女によく似てる
散ってゆくとき猶似てる
顔はほんのり紅(べに)のまゝ
そこらの土にころぶもの。

男子

人の見てゐる處では
わたし決して泣かない
小鳥じやあるまいし
人の見てないときには
涙を溜める瓶(かめ)持つて
聲を出さないで涙をしぼる。

辻旗

あれだけ云つたに出て行つて
それでも思ひが殘るのか
行つたあとからそろ〳〵と
むかし戀しい辻旗を
慕ふて歸る瀧車にくい。

獨者

桃の葉の上に巢を造る
雨の降る日の青蛙
あんなに小さいからだして
人の知らない妻もあろ
たつた一人でこの男
なんだってこんなにしてるだろ。

すみれ

ても、おとなしい紫すみれ
小草の中にひとり眠る
お前の可愛い心をば
せっせと探してゐる人がー
あるのにー
それも知らずにゐるのネ。

鈴虫

涙ながらに聞くような
籠の鈴虫鳴く頃は
しのぶあの夜を思ひました。

男ばっかり

居てもゐなくてもいいならば
世界の女を皆のぞき
男ばかりで居て見たい。

人の涙

人の涙で袖ぬらし
月の出るのにたゞひとり
床に入つたわたくしは
やつぱり涙が湧きました。

（青森にて）

紅い木の實

いつみのつたか生垣に
ひなの祭の人形(ひとかた)の
頰にさも似た紅い實が
雪に被はれて成つてゐる

わたしあなたはいつまでも
實のらぬものと思つたに
人も知らないそのうちに
青い葉かげに實を結ぶ。

髮の亂

六十五篇

枕抱へて

夢でもいいからあの方と
しんみり語つて見たいのよ
今宵も青い灯に
枕抱へてこつそりと
床に入つて泣きました。

遠慮して居たら

今日は行かうか？
明日は行かう！
こんな遠慮をしてゐるうちに
伽羅の袋を結ないだ
麻のロップは切れてゐた。

此の影

私の黒い此の影が
若しやあなたであつたなら
誰に遠慮もないように
いつでも二人で歩くのに
なぜにあなたは男でしょう。

銀のコップ

妾なりたいわ
銀のコップに
でもあの方が
口吻ける
わゝ…なりたいわ
銀のコップに。

少女の夢

ダイヤモンドをちりばめた
純金の指環を貰つた後に
誰かに再び贈つた夢を
今夜初めて見ましたわ。

抱いた夢

想かなってしっかりと
抱いて見たのが嬉しさに
「ハッ」と眼覺めて見ましたら
兩の乳房をしっかりと
抱いてゐるとはしよんがない。

小女心

何んと云つたらいいでしよう
あなたがしっかり把つてる
銀の花壜に此のばらを
差してあげよと云ふ思ひ。

人が泣いても

人が泣いても泣けないわたし
どうして此の頃涙がもろい
母を亡くした故もあろ
でもあの方の心が知りたいわ。

水車

水にあんなに廻されて
わたしだつたら死にますわ
でもごらんなさいよ水車
水を欺(だま)してくる〳〵と
廻つてゐるとはにくらしい。

少女の戀

少女心の初戀は
水晶の箱に秘められた
ばらの花でもあろまいに
いくら匿すても見えますよ。

茨の葉

青い茨の葉も散つた
何を思つてか皆散つた
風の吹くのに亂れてか
自暴自棄でもあろまいに
こんなことから遂にまた
にくいあの方が思はれる。

戀すれば

泣いて見せたり
怒(おこ)つて見たり
此の頃ほんとに
いそがしい
でも誰かのためなら
まあ、まあ。

羞しくつて

とんだ所に珊瑚の玉が
落ちてゐるのに羞しくつて
だまつて歸つては來たものゝ
戻つて拾ふか誰かに知らさうか
何んでもないよで氣がゝりで
晩の御飯もたべたくない。

僞な手紙

あれたけ私を慕ふてて
あれたけ私を信じてる
あの人に―
僞(うそ)な返事を書いたのに
此の頃ひとりで泣いてるわ。

一緒に歩くが

男と一緒に歩くのが
そんなに惡いものかしら
あんなことからあの方と
わたしの噂で一ぱいで
人を見るのも嫌ですわ。

電話口

お話しやうと電話で呼んで
モシモシと云つてゐながらも
何と言はうか彼んと云はうかと
心ばつかりハラ〳〵させて
受話器持つ手が震へたわ。

小さなわたし

何とか言はれて恥しくつて
だまつて表に出て見たが
後の噂が聞きたくて
そつと忍んだ小さなわたし。

少女

そつと抱きしめて
接吻もそつと
自分の乳房に
して居つた。

男と寐るのは

男と寐るのはいいけれど
子供産むのは嫌ですわ
娘はいつか云つたのに
此の頃乳房が黒づんだ。

赤いポスト

何んにも思はず書き終えて
赤いポストに入れたのに
あとでちらほら思はれて
この頃ほんとに氣にかゝる。

寒い日

こんなにお寒くなつたのに
足袋もはかずにあの方は
冷たくないかと思つて見ると
あんまりわたしと云ふものが
弱い者だと考へる。

殘る思ひ

どつから來たのかたゞひとつ
わたしの前にひざまづく
霰こんこの可愛さに
キッス一つをあげようと
思つてゐるまにほろ〳〵と
消えて涙を殘すもの。

人にかくれて

こんなに愛して居る二人
わたしは女で
あなたが男だばつかりに
人にかくれて語るとは
しんから人は詰らない。

たゞ涙

君の命のこひしくば
わたしの心も思はんせ
秋が暮れてはたゞ涙
冷ゆる枕がなほひゆる。

皆な死んだら

皆んな死んだら何としよう
にゝ……何んでもないわいな
厭な噂がなくなつて
わたしとあなたと生きるもの。

親と子

大人になつたらよからうと
子供の時に母はよく云つた
でも大人になつたら詰らない
母の心がわからない。

口惜しい日

どんな寶もうち捨てゝ
死んで見やうと思ふ時
口惜しい調と嬉しい曲が
錆た壺をばたゝくよに
一緒になつて私の
青い袋をかき亂し
弱い少女のつねとして。

初手紙

初めてあなたに出す手紙
糸のもつれを解くやうに
心ばっかりいらいらさせて
お名前書かうといふときに
マツダ電球の灯が消えて
山椒の實のよなお瞳が
わたしの眼に映りました。

新らすい筆

新らしい筆なら殊更に
墨を付けよかつけまいか
いえ……
君のためなら何んとしよう
そつと散らした文字から
はや處女と誇れない。

氣にかゝる

ほんとになんだか氣にかゝる
冗談まぎれに惚れたと云つた
あの日のことが。

白い月

月の照るのに心の月は
いつも晴れぬがかなしいよ
なぜにあんなに白いだろ
なぜにこんなに黑いだろ。

病む少女

心靜めて聞くやうな
夏の小雨の降る頃に
青いポプラの頰からは
銀の涙が露落ちる
肺の痛みに耐えかねて
お針持つ手も膝に下り
息づく咳も今日の日の
ものや思ひのたねでしよう。

赤い表紙

赤い表紙の詩集の中に
細くけづつた鉛筆で
なんとかしるすてやつたけど
あの方が見ないうちに
誰かに見せはしないかと
はら〳〵しながら今日もまた
お針持つ氣になれないわ。

殘念

せつかく面白いこつたもの
自分一人で喜ばないで
あの方にお話しやうと
思つて行つて
あの方の話ばつかり聞いたのが
殘念で仕方がないわ。

冷いコップ

霙降るよな酒場の中で
わたしやひとりで冷いコップ
熱いお酒を注ぐよと見れば
工場歸りの工夫ですもの。

妾の心

どなたにも泣いて見せまいし
元氣な人と思ふでしよう
でもわたしの心は。

熟れた柿

だつて左様じやないかいな
あれだけしっかりくっついて
夏の最中をとほして來たに
熟れ果てたらぽったりと
土に落された柿の實じやもの。

夜の手紙

ヂリ〳〵ヂリーと私の窓に
吹雪が寄せるー
思ひ走らしてじっと沈むとき
私の心を蘇(よみ)かへらせた
寂しい夜の手紙。

新らしい悲しみ

あら……
亂るる、亂るる
琴の調べに
私のこゝろ
わゝ……
新らしい悲しみに。

實のなる木

口吻する時いいけれど
此の頃なんだか氣にかゝる
變なことからあの方の
惡い噂が聞かされて
ほんとなら此の身はどうしやう
紅い木の實がこぼれます。

煙草入

腑に落ちなくて氣がくりな
更紗模様の卷煙草入
あなたのお腰でだまつてる
どなたが贈つたか買つたのか
思つて見たら殊更に
どうでもいいよで惡いよで
髮の亂を嚙みました。

氷枕に

なんぼ拭いてもしよんがない
どなたも汲んでくれぬもの
蒼い神經そと傳え
氷枕に入れて置かう。

豆の畑

髪の亂をかきあげて
若しやあなたの聲でも
聞えはせぬかと思つては
裏の畑にしやがんで
豆の花など弄つてゐる
少女はトラピストの
尼僧のようにかなしいわ。

大人心

子供にならうと思つては
毬をつくやら羽根を追ふ
でも矢張り子供になれぬ
大人は大人でしよんがない。

人の艶書

厭であつても見たいのは
夜半の火事とも一つは
好かぬ人やと思つても
後姿は見たいもの
人の艶書(ふみ)なら猶更に。

歸るすげなさ

何とか思つて
何とか云つて
逢はぬ前から
心にきめて
でも何んにも言はずに
今日も歸る。

銀の花壇に

脚袢の紐の解けるとき
三味を抱へて結ぶてふ
處女心はいつかまた
銀の花壇に散りました。

唄ひなさんせ

泣いたからとて何んとしやう
ひとりの母も死んじやもの
ないて聲なぞ嗄らすより
唄ひなさんせ面白く
若い私(わたし)と手をとつて。

青いハート

暗い晩なら猶更に
ダイヤモンドと思はれる
たゞあの方のことばかり
考へ込んでは死にたいわ
青いハートが痛むもの。

蛙

いま蒔きおろした苗代に
たつた二つの星影ありて
世はやしらけと蛙啼く。

たより待つ夜

たより待つたび夜は更けて
わたしを捨てゝどつかへ行つた
にくいあなたを想ふとき
窓の破れにひんやりと
師走小雪がそと忍ぶ。

髪の亂れ

春じやと云ふに淋しうて
隣垣根にそともたれ
ひとりしく〳〵泣いてゐたら
コミの白花ほろ〳〵と
髪のこぼれに散りました。

男の氣性

着物切れたら持つておいでと
あんなに云つて置いたのに
何んに遠慮をしてゐるのか
まだあのまゝに着てるとは
男の氣性はしよんがない。

處女なれば

「行かう」と云はずといつだつて
御供したいと思ふけど
なんであんなに母(かあ)さまは
あたしばつかり叱るでしよ。

ピアノと笛

あなたはピアノを彈けたなら
私は笛を奏げたなら
蒼白(あしろ)な大空(そら)の下で
そつと合奏する時は
あなたは何を歌ふだろ？
私は何を歌ふだろ？

矛盾

死んで見たいと思ふとき
誰か優しく謂ふたのに
でもその方を私嫌い
死んで見たいと思はせる
にくいあなたの氣が知れぬ
でも私はあなた好き。

短い日

はて何をしやうか、と
思つてゐると
梧桐の葉がガサ〳〵と
落ちる音を聞いた。

涙なら

いつも涙がわたしなら
あなたの黒い瞳から
ポツタリ落ちてもの言はず
あなたの膝にころぶのよ。

人の哀れ

歳暮(くれ)になつたらあの人に
指環ひとつも贈らうと
思つてゐたのが裏切られ
何んにも知らない福壽草
だんだん伸びてゆきました。

三つの霰

ころ〳〵ころと三つの霰
わたしの胸へ降つたけど
先にころんで來たものは
さつさと消えてなくなつた。

ポプラ

おいでなさいと云つてるように
紅いポプラの葉がゆれて
何んにも言はずにころんでくるは
丁度誰かのやうでした。

夕燒の頃

あら、あんなに眞紅に
何處で染めたか蜘蛛の巢に
お羽黑トンボがひっついた
危險(あぶない)もんじやと見てゐたら
とうとう食はれて死んじやった
少女心か可愛いなあ。

風も吹かねど

風も吹かねどわたしの胸に
緋色の風がしのび來て
五尺のからだもゆれました。

不安

あなたは此の頃どうしておいで
泣いてゐやうと笑つてようと
なんでもないよなことだけど
妙に思つて見たくなる
はてどうしたもんだらう?。

胸の亂

別れて仕舞(しまふ)か？一緒に死なうか？
双子眞珠の身じやないが
たつたひとりで考へこむと
夜の時計も泣いてゐた。

啞の小鳥

六十四篇

旅の乙女へ

唄ひならしやろや大森おとめ
旅に賣られた身じやものえ
かなしいこともあらうけど
お酒はどこへもある程に
さあ唄ひならしやろや手をとつて。

（函館大森にて）

手拭

一寸手拭忘れても
洗つてくれたあなたには
私ほんとに感謝する
あなたが洗つたもんだもの
汚(よご)してならぬと思つたり
汚して見たいとも思ひます。

紅いコスモス

紅いコスモス咲いたなら
妾が第一口吻(くちづ)けて
緑の酒をとそつんで
銀の花壜に差す程に
お部屋の机に置かさんせ。

病床にて

私がすつて私が喘いた
煙草のゆくへを見てゐると
だん〳〵薄くなつてゆく
人の此の身がなげかるゝ。

理屈云はずに

嬉しいと云へばそれまでだ
悲しいと云へばそれもいい
そんなことなぞ云ふ前に
たつた一度でいいからに
しんから戀して見なさんせ。

紅い實

なんにも云はずにたゞひとつ
紅い眞珠の實をつけた
昔の花もこひしかろ
今朝も淋しい南天木。

造花

いくら待つても開かない
造り花なぞ見つめては
たつた一人で泣いてゐる。

もみぢ散るのに

鐘が鳴るもの歸らうじや
男は云つたが女は泣いて
だれがつくやらあの鐘は
山のお寺の裏庭で
風にもみぢの散るものに。

初夢

世界の人を皆呑んで
たつた一人になつた時
裏の柿の實色づいた
あらほんとに羞かしい。

ゴム毬

強くうつたら強く立つ
そつとうつたらそつとたつ
私の心はゴム毬よ。

銀鈴

銀の小鈴のすげなさは
一寸障(さは)るとすぐに鳴る
處女心じやなからうが
觸れていいやら惡いやら
だまつて稲荷に願かけた。

平民の子

華族様の嬢さんや
坊ちやんであろまいし
戀になやんで見たとこで
私にや爺やも乳母もあるでなし
いくら苦しいと云つたとて
誰にも語らず居るばかり。

薄氷

人の子故のさみしさは
秋の小道に張る氷
誰も知らないそのうちに
下駄で踏まれて終ふもの。

優しいばら

ばらの枝なら怖(こわ)かろと
とげはしつかりとつた故
紅い花だけ受けてくれ
私の心と思はして。

芦の露

觸れていいやら惡いやら
芦の葉上(はのへ)にひざまづく
露をだまつて見てゐたら
あなたは風にさらはれた。

世の中へ

どんなに結めよと思つても
どんなに力んで見たとこで
結らぬように出來てゐる
宮の太鼓と思はんせ。

君ゆく日

人を送つてとぼ〳〵と
村の小みちを歩いたら
草の露やら涙やら
襦袢の裾が皆ぬれて
いつに乾くか知らなんだ。

鐘が鳴る

鐘が鳴ります心の奥で
誰がつくやらごん〳〵と
はて敢果ない鐘だ
誰がつくやらわからない。

まさきの實

いつも淋しいに今日もまた
南の窓にもたれては
いつも變らぬ生垣に
人の知らない實を結ぶ
君をすげなく見つめてた。

旅の夜明け前

瀧車にゆられて艀舟にのつて
船から上つて見たものゝ
何處が西やら東やら
鳥はやつぱり啼いてゐた。

（北海道森港にて）

人の子

何んにもしないで今日もまた
粉雪ちら〳〵降るといふ
空をぼんやり眺めては
人の子故の身がかなし。

案内しよか

案内すませよか車にしよか
西はこつちで東はそつち
ポプラの葉かげが見えたなら
風のあるのを思はんせ。

（旭川にて）

青い灯

「赤いお酒や黄色いお酒
いかゞでござんす」
何あにいろばよそれよりも
あんたの顔が欲しい故
今日もかうして來は來たが
だまつてゐる間の心には
青い灯がついてゐる。

（湯の川温泉にて）

蛇苺

紅いからだの蛇苺
子供はそなたを好いちやつて
一つ食つたら死んじやつた。

愛の自由

私の知つたたつた一つの愛
それは私ひとりで發明したのだ
登録はしなくつても
特許は受けなくつても
私の權利は
どなたの侵害も許さない。

胸の火事

火事が出ました私の胸に
誰がつけたか身もやける
早く消してはれくまいか
たつたひとりの消防さん。

人を待ち宵

人を待つ夜の嬉しさは
金(かね)を拾つた夢でした
逢つて別るゝ悲しさは
青く眼覺めた夢でした。

子蜘蛛

子蜘蛛は今一日も心に
軒端の下に巣をつくる
それをの愛いと思つたら
雨よ降るなちやいつまでも。

面影

じつと見てるとだまつて笑ふ
わたしが泣いても
矢張り笑つてゐる
あなたの顔がなつかしく
寫眞片手にけふもまた
ひとりしく〳〵泣いて見た。

おとめ

そつと吹いては飛ばされた
シヤボン玉ではないけれど
あんな小さな蜘蛛の巣に
あたつて此の身もくだけたわ。

白雲へ

流れてゆきますましろな雲が
西にゆくならお願あるわ
あたしの心を持つてゆき
そつとあの方の机の上に
音のせぬよに置いてくれ。

春の寂れ

春になつたらよからうと
思つてゐたのに陽は暮れて
去年花咲いて枯れたてふ
竹を思つて泣きました。

赤い花

赤い花なら好きだけど
口吻するのも何とやら
ひとりでほんとに羞しく
誰も居ぬのを見透して
今夜初めてキッスした。

夏の夢

垣の根元に色づいた
ほうづき取つて口吻ける
夢からほんのり覺めた時
木の間がくれにこつそりと
青い月樣のぞいてゐた。

何故か

霧で包まる孤島の岩に
立ちて横笛奏くような
敢果ない思がまたぞろに
裏の山から吹いて來る。

様の字

あんなにわたしを嫌つてる
にくいあんちくしよに
出す手紙へ
表だけにも様と書く
その心の苦しうて
じつと唇噛んでゝは
だまつて様の字見詰めたわ。

神様よ

神様よ、神様よ
悲しいことをなぜ造(つく)た
先頃染屋の小娘が
ふとしたことから遂(とう)々に
あなたをうらんで死ました。

消電

一路に思つて勇氣を出して
書いた手紙を讀んでたら
電氣が消えて
私にややさしいお名前が
瞳にはつきり殘つてゝ
心ばつかりぼんやりと
明るくなつて居りました。

旅まくら

ひとりの旅の嬉しさは
冷ゆる枕をそとかゝへ
バナヽの花の咲くといふ
南の夢でも見やうとて
可愛いい小膝を抱くのです。

雪の夜

ザク〳〵ザク〳〵と
私も歩くとお前も歩く
私が走るとお前もまねる
ほんとに暗い寺屋敷
足駄で雪を踏む心地。

日まはり

あなたお日様わたくしは
日まはり菊でいつまでも
あなたに付いて廻るけど
夜になつたら淋しいわ。

嵐の夜

青い灯も見たくつて
町の端に出て見たら
嵐の強い故かして
草には露も見えません。

春の雨

阿古屋御前のひくような
銀糸の琴が今宵また
私の心をかきみだす。

小雨止まぬに

譯は知らねど淋しいわ
春に小雨の止まぬのに
紺の暖簾の間から
青い灯がちらづいて。

青い空見て

空は深碧なにも無し
啼いた小鳥は何處へ行った
お山夕燒火事と見て
あれだけ廣い海こえて
南の國へ逃げたのか？

白酒の醉

雛の祭に白酒を
おあがり召されと
注がれて
うは目使ひに顔見たら
飲まないあなたが醉つてゐた。

春の午後

空は唯蒼い
だまつてゐると
眠たくなる
何も聞えない。

鬼灯

ほほづきよ、ほほづきよ
お前の子供を可愛さに
親の許も受けないで
そつと着物をぬがせては
納屋の後で口吻けた。

苺頽(ぐみ)子の實

澁くつて酢つぱくて甘いのは
戀の心とよく似てる
山のぐみの實色づいて
眞白な砂にころんでる。

凧

凧よなぜ泣くなんで泣く
糸が切れたらどうしやんす
雨の降るのを恐れてか
風も吹かずば泣こまにい。

やぶこうじ

見越の松の中庭に
咲く梅よりも奥山の
藪の眞中に實を結ぶ
ほんとに小さいやぶこうじ
私は一番好きでした。

（吹浦にて）

新らしく

友禪摸様も猶更に
銀の刺繍をしたやうな
ざくろの花がちら〳〵と
私の胸に咲きました。

野風呂

野風呂に浸つて
星見てゐたら
コーモリが飛んだ
大自然へ私の魂もとんだ
其處には幸福が
一杯になつてゐた。

不可能でも

いくら降つても
積れない
三角塔に降る霰
男の氣性のそのように。

山椒の實

黑い瞳がほろ〳〵と
瞼(まぶた)に紅(べに)をつけたまゝ
畑の隅で泣いてゐる
何悲しいか語らんせ
私の可愛い山椒の實。

愛の玉

握つて居ればだん〳〵熱く
離して見ればすぐ冷える
私の大切な愛の玉
マツダ電球と間違えた。

若い心

私の心は裏山の
萱の間に生きのびた
桔梗の花の蕾でよ
咲いていいやら悪いやら
一日思案をしてました。

啞の小鳥

啼いて見られぬかなしさは
啞の小鳥のすげなくて
墨をすらうと思つたら
硯にや氷が張つてゐて
まゝにならぬは筆の先。

水仙の蕾

風よ吹くなちや水仙に
白い袋をしつかりと
いつまで抱かせて
あげたけりや。